

巻機山と望月さん

吉田 光二

巻機山の家と望月さん

私が「巻機山の家」の会員になったのが1982年。山の家が創設されたのは1967年ですから、できてから15年後のことです。創設の頃の資料があるようで無く、不明が多いのですが拾い集めてつないでみたいと思います。

記録をまとめると

1967年11月3日 第1回総会 この日を創設記念日とする。
規模：総2階延べ13坪 会員制の山小屋
会員とは出資1万円以上の者をいい、団体は認めない。
年会費は1,000円 宿泊は学生100円 大人150円
創設会員14名(87口) 代表：金子昌彦 事務局：松沢利夫
小野塚忠男、内田碧、岡山晃久、鈴木徳司、鈴木宏一、田村貢、箕浦三郎、
望月力、村上絢子 酒井耕一 安野正弘 谷地田トミ子
土地は上田屋より50坪を借りる 借地料1,000円

と、というのが創設の頃の様子です。1口が1万円ですから87万円で作られたと考えてよいかと思えます。

当時、三条高校山岳部顧問をしていた金子昌彦さんが中心になって、長岡市在住の松沢さんと2人で「山登りを楽しむ自分たちが、自分たちの小屋を持ちたい」という単純な夢を実現したかったということで、2人が知人を誘って資金集めをして作られました。金子さんは三条高校のOBで望月さんと、また、顧問としてのつながりもあって秀峰山岳会の会員である高橋小一郎先生とも親交があり、一時期、秀峰山岳会の会員であったこともありました。そうしたことからと思いますが、創設会員に秀峰山岳会初代会長の箕浦三郎先生の名前も見受けられます。

その後、箕浦先生が亡くなられたところを高橋小一郎先生が受け継がれています。私は1971年に初めて小屋を使わせてもらい、1982年に会員に加えてもらいました。

創設から17年経た1984年、山の家は大きな曲がり角をむかえます。

- ①小屋の傷みが激しく早急な補修が必要になっていること。
- ②会の財政がそれらの補修工事に耐えられる状況でないこと。
- ③金子代表委員の退会表明。
- ④事務局長の退会。

加えて、それまで「上田屋の土地」ということで借地契約を結んで運営してきていましたが、「上田屋の土地ではなく共有地だった」というおまけまで。

11月10日～11日の総会で、

「新事務局には、秀峰山岳会を動かすことのできる望月が担当し、吉田会員と金子代表委員から入会申請のあった長谷川一良氏とその補佐をする。」

「来春、補修方法と補修費用を専門家である長谷川一良氏より検討してもらい、事務局で予算検討する。」

と集約しました。

そして1985年の総会で、小屋の改修と会員の再登録・新会員の募集を行うことを決めました。

1986年、雪解けを待ってよいよ改修工事です。以下はその記録です。

- 4月15日 事前協議（望月、高橋、長谷川、吉田）
工事日程等を確認。
- 5月23から24日 基礎工事（望月、高橋、長谷川、増田、吉田、長谷川工務店3名）
ポリホース240mで上水工事完成。手の切れるような水が流れ出る。
車道から一輪車で生コンを運ぶ。ランプ、バーベキューセット搬入。
- 6月24から26日 本体工事（望月、高橋、長谷川、吉田、長谷川工務店3名）
3日間雨の中の作業。雨の晴れ間にペンキ塗り。
- 7月4から5日 本体工事（望月、高橋、長谷川、吉田、長谷川工務店4名）
外装板金工事、内装工事、ペンキ塗り。
- 7月8から9日 本体工事（長谷川、長谷川工務店1名）
外装板金工事、内装工事、サッシ取り付け。
- 7月25から26日 本体工事（望月、高橋、長谷川、吉田、長谷川工務店4名+三工山岳部）
内装工事、ベランダ工事、便槽工事、ペンキ塗り。
- 8月2から3日 内部整備（長谷川）
網戸、ストーブ、煙突、一階テーブル、玄関鍵等取り付け。
- 8月15から16日 内部整備（吉田）
ランプ、ゴザ搬入
- 8月19日 内部整備（長谷川、吉田）
ベランダ鍵取り付け、煙突補強、便槽枠木取り外し。

そして9月13日から14日にかけて「改修工事竣工・巻機山の家20周年記念総会」を雲天を会場に行い、翌日、長谷川一良会員寄贈の杉板と欅板に石部栄次郎会員が揮毫し、高橋小一郎先生が塗装して作られた看板を玄関と二階に取り付けて竣工としました。当日の出席者は、小野塚忠男（雲天）、望月力（秀峰）、高橋小一郎（秀峰）、安野正弘（高体連）、久保敏男（秀峰）、長谷川一良（秀峰）、大原正昭（三工OB）、清水満州雄（秀峰）、近藤和善（加茂）、小林源一郎（高体連）、小林壮一（秀峰）、佐藤荘市（秀峰）、吉田光二（秀峰）の13名でした。

こうして振り返ってみると「あんなことはもうできない」という思いが湧き上がってきます。いくら素晴らしい自然の中といっても、その分、作業は不便であることはいうまでもありません。炊事はもっぱら高橋先生が外で傘をさしながら行い、夜は石油ランプの明かりで新聞紙を敷いて寝るといふ、改修を行っている山小屋で寝食しながらの工事でした。しかも雨のおまけ付きの難工事、のべ18日間78人の労力を要しました。

その食料費まで入れた改修費用は1,315,219円と膨らみ、秀峰山岳会から30万円を借り入れて支払いを済ませ、秀峰には毎年10万円ずつ3年返済というかたちでお願いしました。この返済は1989年に完了しています。

まさに望月効果の現れでした。望月さん自ら生コンを練り一輪車を押していた姿が思い浮かびます。

改修工事を終えて一息ついた1988年、住友不動産の「巻機山開発計画」が公表されました。雲天新宅から工事道路を少し入った送電線のあたりに巨大なホテルが建ち、その前から7合目までゴンドラが架かり、さらに8合目までリフトが架かるというもので、駐車場4,000台、スキーセンター3棟、レストハウス4棟、ホテル収容人員600~800人、8人乗りゴンドラ1基、クワッドリフト7基、ペアリフト16基という巨大計画です。ちょうど巻機山の家所にレストハウスができることになっていました。

その前にも何回か開発の話はありましたが、今回は中央資本が図面まで作っての話で、巻機山周辺は大騒ぎになりました。それらの詳しいことは「たった一人の叛乱・とうちゃん巻機山に生きる」（1996年山と溪谷社刊）をご覧ください。

この開発計画に対して山の家は「対応策」をつくって身構えることにしました。

巻機山開発計画に対する「巻機山の家」としての対応

基本的な態度

1. 「巻機山の家」の会は、巻機山を愛する者がその心を寄せあって組織されています。したがって、巻機山の自然が破壊されることには基本的には反対します。
2. しかし、その開発が清水地区にとって必要なものであって、地区の総意として行われる場合においては、地区の総意を尊重し、対立するものではありません。

主張すべき「山の家」の権利

開発計画に賛成・反対にかかわらず、「山の家」の会は、開発者に対して「山の家」の権利を主張します。

基本的には

1. 現状のまま、「山の家」を営み・利用して、巻機山の四季折々の自然に親しめること。
2. 地区の総意に基づく開発である場合は、その必要によっては移転に同意する。ただし、移転先及び移転後の建築物等については、現在の条件及び状態を上回るものであり、会の同意によって行われること。

開発者との交渉について

1. 「山の家」の権利を主張するにあたっては、巻機山麓に存在する山小屋の代表者による仮称「小屋主会」の設立を目指し、各小屋の主張を取りまとめて、開発者との交渉の窓口とします。
2. 「小屋主会」の設立ができなかった場合においては、「山の家」独自で開発者に対して交渉に臨みます。
3. 状況によっては臨時総会を開いて態度決定をします。

万一、移転の際の具体的要求

1. 移転とは、別の場所に新たな山小屋を新築するものである。
2. 移転先においては無償でその土地を提供すること。
3. 移転地は、巻機山を楽しむ（登山等）にあたっての現在の地理的条件を上回ると共に、四季を通して小屋を保守するに可能な場所であること。
4. 土地面積及び建築面積は現状を上回るものであり、「小屋主の指定する建築物」であること。
5. 移転に伴う一切の費用は開発者によって負担すること。
6. 移転慰謝料を支払うこと。
7. 移転交渉等に要する費用弁済を行うこと。

1989年、揺れ動いた「開発計画」は、清水地区が住友不動産に拒否表明をして一段落の状態となりました。そして雲天新宅の建築へとつながることになります。

こうしてみると、創設から19年目で改修し、そのまた19年後の中越地震の翌年、2005年に補強工事を行い、2006年は100年に一度の大雪。そして今年で40年となりました。よくもったものです。しかし、この間に、組織は老化し望月会長も40周年を目前にして亡くなられてしまいました。昨年の秋、小屋前での記念撮影が最後のものとなりました。小屋の大黒柱を失ったような虚脱感が否定できません。

雲天新宅後援会と望月さん

雲天が移転新築するにあたって、雲天を後押ししようと「雲天新宅後援会」が結成されることになりました。初代会長は、雲天に集う山仲間から推されて望月さんが就任されました。

1990年7月15日に雲天新宅後援会第1回総会が開催され、9月15日には新築なった雲天の座敷で、85名の参加のもと「山の宿・雲天新築竣工式並びに祝賀会」が望月会長の開会挨拶を皮切りにして盛大に行われました。

以下は12月1日付けの雲天新宅後援会会報「雲天通信・創刊号」での会長挨拶です。

名峰巻機山の麓、清流登川の台地に、雲天さんが豪農の館を移築し、外観を現代風に、装いも新たに開館なさいました。

それを機会に、巻機山の自然を守る会のトウちゃん会員、カアちゃん会員の面々が集まって「雲天友の会」をつくり、このたび第一号の『雲天通信』を発行することになりました。

巻機山にはまだまだ自然がたくさん残っていますが、リゾート法などという美名のもと、あちこちで自然が破壊されているのが現状です。会員の皆さん！力をあわせて巻機山の自然を護り、子供や孫に美しい巻機山の自然を残してやろうではありませんか。

雲天友の会会長 望月力

この雲天新宅を支援する運動とは、ただ単に雲天をバックアップするというのではなく、巻機山の自然保護運動の意味合いを多分に持っていたのでした。そうした意味でも望月さんは組織の顔としてはうってつけでした。2006年7月9日の総会で体調不良を理由に辞任を申し出られて次期会長にバトタッチされましたが、16年間、しっかりとその役を果たされました。

以下に「雲天通信 1996年10月15日第12号」に掲載された望月会長の文章を紹介します。

私と清水の出会い 美しき巻機山 雲天後援会会長 望月力

私のはじめて巻機山に登ったのは、50数年前の昭和16年頃だったと記憶しています。

仕事終了後、三条を8時頃の列車に乗って、夜中に塩沢に到着、その頃バスなど通っていませんから、テクテク歩いて清水部落を通り抜けて、登山口まで夜どおし歩きました。登山口で仮眠し、夜が明けると頂上めざして登ったものです。

家に帰りつくのはその日の夜の12時近くでした。今とちがって登る人も少なく、めったに人に会うこともありませんでした。

秋の巻機山の景色は、それは素晴らしいものでした。ニセ巻機から井戸尾根までの斜面が、一面枯草におおわれて黄金色に輝いている景色、その美しさは50数年たった今でも鮮やかに目に浮かんでまいります。

美しい景色を表現するのに「絵のような美しさ」といいますが、まったく一幅の風景画でした。絵心のない私でも筆をとりたくなるような心持ちになったものです。今と違ってカメラは高価で、われわれは持つことができませんでした。全自動だの、使い捨てカメラだのと、子供でも持っている今の世の中とは、隔世の感があります。

その美しい巻機山の景色が、戦後の登山ブームと、交通の便がよくなったこともあって、見るも無残な姿、斜面の荒れようは、目を覆うばかりになってしまいました。近年、山を愛するボランティアの皆さんの努力のおかげで、登山路の補修や植生の復元がされ、山も徐々に昔の姿をとりもどしてきました。

加えて、登山靴がゴム底になったのもよかったと思います。長いあいだ、地下足袋で登っていた山男たちが、革の登山靴を山男のシンボルのように憧れ、少々無理しても買い求めたために、地下足袋はすっかり影をひそめてしまいました。

ただ山靴はもともとヨーロッパアルプスの岩山を歩くように作られているために、底に鉄鋌のムガー、クリンカー、トリコニーなどのスパイクが打ちつけられているような頑丈な山靴で巻機山の柔らかい植生の斜面を歩けば、当然のことながら歩くたびに土を掘り起こし、大きな靴跡を残していくこととなります。

そこに雨水がたまり、そこをまた歩くので穴がだんだん大きくなって、ついには泥田となってしまいます。さらに、泥田をさけてわきのほうを歩くので、目もあてられぬ惨状を呈します。対策として、まず、第一に木道を作り、ロープを張ったりして、登山路以外は立ち入りを禁止するしかないというわけです。

植生の復元や登山路の補修は、ボランティアの人たちの懸命な奉仕に頼っていますが、自然は一度破壊されると元どおりになるのに長い時間がかかります。

それに、労力は奉仕に頼って何とかやっていくとしても、登山路の補修には資材が必要ですから、購入資金を捻出さなくてはなりません。自然を守る運動も、個々人の善意だけでは守りきれない状況です。どうしても行政の援助の必要なことを痛感するしだいです。

言うまでもなく、山へ登る人は自然を大切にする気持ちを忘れずに、山のモラルを守ってもらいたいものです。まあ、これは釈迦に説法でした。失礼しました。

おわりに

「巻機山の家」にしても「雲天新宅後援会」にしても内容が公になっていない部分が多くあります。追悼号に適切かどうか疑問がありますが、今後のことを考えると望月会長のかかわってこられた仕事を資料として残しておきたいという思いから本稿を執筆しました。山の家のこと、雲天のこと。私は「切ない時の望月頼み」という切り札を胸に下働きをさせていただいてきました。この切り札があったことでどれだけ安心して仕事ができただろうか。その分、これからについては本文中にも書きましたが、望月会長を失った虚脱感が私自身を覆いきっています。

こうして仕事を振り返ってみるとその思いは一段と大きくなります。濃霧の中で方位を失ったような感じ。岩場の真っ只中で確保ロープが解かれてしまった感じと、その存在の大きさを改めて実感しています。

生前のご指導に感謝申し上げながら、今後も見守り続けていただきたいとお願い申し上げます。 (2007年8月16日合掌)

注1 文中に「山の家」「山小屋」「小屋」と様々に表現がありますが、「巻機山の家」という名称の山小屋および団体と解してください。

注2 文中の「雲天後援会」「雲天友の会」は通称であり、会則上は「雲天新宅後援会」が正式名称ですが原文のまま記載してあります。2000年に10周年を契機にして名称変更を行い、現在の正式名称は「雲天友の会」です。

(2007年 秀峰山岳会発行 望月前会長追悼集掲載原稿より抜粋)

写真説明

- ① 1986年5月23日 生コンを一輪車に積み込む望月会長。右は長谷川一良会員。
- ② 2006年11月19日 県央工高山岳部員との記念撮影。これが山の家への最後の訪問となった。左端は高橋小一郎先生、右端は吉田。

